

■随想

# 山岳班OB、ヒマラヤへ 飯田高校創立60周年記念事業

北城節雄（高2回）

## ヒマラヤ遠征の夢に火がつく

昭和19年（1944年）、飯田中学校入学、翌20年（1945年）、敗戦により学校工場も閉鎖となり、戦時体制から一気に開放され、それまで体験したことのない自由な学校生活が始まった。それまでの戦時色を一掃して始められた授業も、定められたカリキュラムは無く、生徒等はいきいきの専門分野を定め勉強を深めていった。班活動（部活）も始まった。

山岳班は生物班と地学班の有志によって誕生した新しい班であった。装備も食料も無い中、何人かのグループで、ときには単独で、一般の登山者など皆無に近い南アルプスや中央アルプスを跋涉し尽くした。わらじや地下足袋で3000メートル級の主脈の縦走や冬山登山もした。そうした登山は単に頂上を極めることだけが目的で



●ほうじょう・せつお  
高森町山吹出身。生物班に在籍、創設した山岳班にも所属。元伊那谷自然友の会々長。伊那谷丸ごと博物館づくりを提唱。

なく、必ず生物や地質の調査研究的なことを併せて行う慣習があった。その結果は自然系の専門誌、例えば雑誌『採集と飼育』に発表するほどの誇りと積極性をもってなされていた。やがて大学に入り、その道の研究者になっ  
ていった者も多かった。

その飯田高校山岳班の仲間の中に、後に朝日新聞社に入社することになる本多勝一（当時は同級生の間では敬称をつけない）がいた。彼は京都大学で探検部を創設し、在学中にバキスタン大学の学生と合同探検隊を組織した。それから2度にわたりカラコルム・ヒンズークシの山に入るなど、ヒマラヤ登山の草分け的存在であった。（報告書 松下進編『スワート・ヒンズークシ紀行』、本多勝一著『知られざるヒマラヤ』）

昭和33年（1958年）の正月、本多の遠征報告会が、山岳班OBが中心になり飯田市内の或る飲み屋にて行わ

れた。そのとき本多は「ヒマラヤは考えるほど彼方のものではない。国家的な事業として行われたマナスル遠征隊などは論外で、少人数で切り詰めていけば費用などなるとかなる。何より大切なものは何としてでも実現するという熱意と行動力だ」と海外遠征や探検の基本的精神を熱っぽく説いた。当時のヒマラヤは選ばれた人だけの舞台であり、一般人に手の出せるような世界ではなかった。その場にいた者達はヒマラヤ遠征は可能だという本多の言葉に興奮した。

ちょうどその頃、飯田高校は創立60周年を迎える時であった。その記念行事のひとつに、山岳班OBによるヒマラヤ遠征を取り上げてもらおうではないか、という声があがったのは酒の勢いばかりではなかった。行動は電撃的に進められた。1月7日にはその席にいた何人かが代表となって飯田高校の北原明治校長のもとを訪ねた。多分一笑に付されるに違いないと思っていた話に北原校長はのってくれた。そして昭和33年1月11日の信濃毎日新聞には「ヒマラヤにいどむー飯田高松高校山岳会ー」の見出しのもと、北原校長談として「今日、山岳班のOBの皆さんからヒマラヤ遠征壮挙の話を聞いた。60周年を迎える当校としてはこれ以上の話はない。近く同窓会、PTA役員会に諮って、是非60周年の記念行事の一環と

して取り上げるつもりだ。遠征費は個人が調達するといふ話もあるが、当校としては特別会計を設けてなんとか援助したいと思っている」という記事が大々的に報じられた。到底実現出来ない夢の中の話と思っていたことに、北原校長は本気で耳を傾けてくれた。具体的な資金援助のことまで相談にのってくれたことにも感動し、何としてもこの計画を前進させねばならないと心底期するものがあつた。

### 準備、ネパールへの旅に

当時の外貨事情は極端に悪く、一般人の外国への渡航は禁止されていた。国交もないネパールへの入国は、今では想像もつかないほど困難で厄介なものだった。第一関門は大蔵省渡航審議会の許可の取得である。慣れない官庁街に幾度となく足を運んだ。二人の隊員が日本地質学会員であり、地質の調査隊という名目で文部省後援でも取り付け、渡航審議会の許可を得た。あまり貧乏隊では相手国が警戒して、入国の許可が下りないということも耳にしていたため、中日新聞社にも後援を依頼し了承された。登山用品などは各メーカーにお願いすると、ヒマラヤ登山で使用できるかどうか試しに使ってみてほしいと逆に依頼され、装備等の支援をしてくれるところが

多かった。携行食料として、当時、市販され始めたばかりのインスタントラーメンが事務所として借りていた中日東京支社の倉庫に山のように運び込まれた。いまに思えば、その頃の世情は戦後の新しい時代が始まったという期待感の中で、若者の冒険的な行為に理解を示し、後押ししようとする風潮は今の時世よりずっと強かったのではないだろうか。

今なら飛行機でひとつ飛びだが、空路が開設されていないあの時代には、インドへ渡るにもイギリスの貨客船を利用した。その船は途中、香港・シンガポール・ペナン・ラングーンと寄港し荷物の積み下ろしをしていくので、インドの玄関でもあるカルカッタまでの船旅だけで40日以上もかかった。日程的には無駄な日数が費やされたが、初めて外国を経験する我々にとっては、だんだんに馴化されていくことでもあって好都合だった。

噂に聞いていた悪質なインド税関の検査を長時間受けた後、無事に通関できた。そして汽車でネパールとの国境の町パトナに向かった。特急の1等車は4名ずつの部屋に仕切られ、窓には鉄格子がついていた。乗車の時、日本の領事館員から、治安の悪いインドでは途中どんなことがあってもドアを開けてはならないと注意をうけた。列車はデカン高原を走り続け2日目の昼頃にパトナに

着いた。ここからは古ぼけた飛行機の旅となった。やがて数時間後にはネパールの首都カトマンズに到着した。

## ヒマラヤの巨峰連なるランタンの村へ

大きなヒマラヤ山脈は、いくつかの小さな山脈に分けられ、それぞれに名前が付けられている。われわれが目指したのはランタン・ヒマールというヒマラヤ山脈の中央部に位置する地域である。その中の主峰ランタン・リルン（標高7245メートル）に登頂したかった。もちろんまだ誰も手を付けていない処女峰である。50名近いポーターを雇い、小分けされた荷物がキャラバン隊を組み、シエルパ（高所人夫）の指揮のもと運ばれていった。われわれ隊員は荷物も軽く、思い思いの調査収集をしながら、踏み跡のような道をたどった。踏み跡のような道といってもこれがチベットに通じる主要な交易路である。集落は1日程の行程で着く距離を置いて点在していた。そこをたどりながら11日間かけ、目的地であるランタン・ヒマールの麓の集落、ランタン村に到着した。すでに標高は3500メートル以上であり一寸動いただけで息切れがした。

ランタン村は氷河で削り取られたU字谷の中にある。集落のすぐ後ろにはブルドーザーで押しこくったような



ベースキャンプでの隊員（後列）寺畑哲朗（県ヶ丘高）松島信幸（高2）  
（前列）新井 均（高5）北城節雄（高2）山田哲雄隊長（高2）笠井 亘（中日記者）

巨石の山ができている。それはずれ動いている氷河の末端であり、氷河から溶けた水が岩の間から滝になって落ちていた。目指す山は近くにあるのだからが厚い雲が立ちこめて何も見えない。体は寒く冷え、頭はガンガン鳴り、現地調達の食事のせいか下痢きみで食欲はない。荷物を運んでくれたポーターに賃金を渡す。夢にまでみたヒマラヤに入り込んでいるというのに、感動もなくベースキャンプとするテントの中に倒れ込んだ。

次の朝だった。「おい、すごいぞ！」という甲高い声にテントから這い出すと、昨日は視界が悪く気づかなかったが、目の前に巨大な岩と氷の壁が聳えている。ほとんど垂直に見える壁を仰いで視線を辿ると、はるか上の方に朝日に照らされた氷塔の尖塔が見える。主峰のラントン・リルンだ。仰ぐと首筋が痛くなるほどのものすごい高さであり迫力だ。この山容を見た途端に度肝を抜かれた。恥ずかしくもなく直感した、「この山の登攀は無理だ……」と。日本の山とは規模が桁違いに大きい。岩壁の上部から轟音を立てて落ちてくる雪崩の中を突き抜けるように屹立している巨峰。そこは、人間の手がまだ及ばない遙かに崇高な世界であった。これから行おうとしている登山行為は、いかに思いあがった大それたものかと畏れを感じた。



左側面下方より稜線をたどりシャルバチュム（6707メートル）頂上に達す

偵察の末、主峰のランタン・リルンはわれわれ如き貧弱隊には到底無理だという結論になった。こんなこともあるかも知れないと、第2目標にしていたのが同じ山群の中にあるシャルバチュム（標高6707メートル）であった。この山があることはその前年（1958年）にこの地域に入った深田久弥隊から聞いていた。ランタン・リルンに比べたら標高も低いし、当時のヒマラヤを目指す登山家の間では話題にされていない山だった。それでもまだ誰もが登頂を試みたことが無く、地形についてもどこに氷河の谷が入り込んでいるか、何も判っていない。処女地であり独立峰であることは、ヒマラヤ初見参のわれわれが攻撃目標にするには十分過ぎる程の挑戦であったのだ。

### 登頂を目指しアタック開始

転進は早かった。すでに10月、ヒマラヤは何時、冬の天候に変わるか分からない。シャルバチュム登頂を目指して行動計画が作成された。まず頂上に達するためのルートを探らなければならない。崩れ落ちる氷壁の中のクレバス（氷河の裂け目）を避けながら行きつ戻りつ、じりじりと標高を上げていった。5000メートルを超える辺りから高所障害が現れはじめた。仲間の誰もが強

烈な頭痛や動悸に襲われはじめたが、酸素ボンベを持たない登山隊には施す術もなかった。比較的障害の軽度な者が交代しあつて頂上への攻撃用のテント(キャンプⅢ)を標高5700メートルの雪原にまで上げていった。ここから頂上までは何とか1日で行けるのではないかと判断したのだが、最初の攻撃隊は立ちほだかる氷壁へのルート工作に苦闘し、時間切れで敗退した。

(以下登頂者のメモより)

翌10月25日、登山を開始し始めてから17日目、温度計を見るとマイナス25℃、いよいよ全てを賭けたアタックの日。食料からみても健康状態から考えても、今日の敗退は許されない。凍結を怖れて抱きかかえ寝ていた靴を履こうとするが、普段なら何でもない簡単な動作にも、時間ばかりかかってしまう。隊員2人とシエルパ2人は、それぞれにザイルでしっかりと結びあつて出発する。昨日の踏み跡をたどりながら、一番難関としていた稜線に通じる、急傾斜の大斜面に取り付く。雪の表面は凍っているがその下は粉状の雪になり、更にその下は固い氷となっている。その氷の層に足場を切らなければならぬので、表面の雪を体で押し除けて、雪の中を泳ぐようにして一歩ずつ前進する。一番恐怖感を覚えたのは、斜面全体が雪崩を起こしはしないかということだった。とき

どきゴンという不気味な雪の切れるような音がする。40メートルのザイルが伸びきるとトップを交代した。それを繰り返しているうちに、やがて雪の表面が固くなってきた。体は落ち込まないので、スリップ事故だけに集中すればよくなった。先頭者がカットする氷の破片が容赦なく顔面を攻撃してくる。痛みが急傾斜で除けることも出来ない。テントを出てから緊張が続いた。5時間ほどの登攀の末、やっと頂上直下の雪田に出ることが出来た。最後はドーム型の氷の峯であった。廻り込むと頂上は急峻なピラミット状になっていた。稜線の右斜面はものすごい岩壁になっていて、遥か下の氷河まで一気に落ち込んでいる。

ヒマラヤ処女峰登頂の慣習に従い、最後の登りは自国のネパール人シエルパを先に立たせる。「サーブ(旦那)オーライ!!」のシエルパの声で、周囲には高いところはなくなった。ついに頂上に立った。ピッケルの柄にネパールの国旗、中日新聞の社旗、飯田山岳会の旗をつけた。高く掲げ写真を撮る。遠くにガネツシユの山々、マナスルの連山、チベットの高峰など見渡される。ランタン・リルンも同じ高さの位置に見える。時間は瞬く間に過ぎた。

ガスが巻いてきた。我々は山頂から追われるように下



「サーブ オーライ!!」頂上に立つ二人のシェルパ 昭和34年(1959年)10月25日

山の途についた。登頂の喜びに比べ、無事帰りのルート  
をたどれるのかと、心配であり恐怖も大きかった。遙か  
下方に登頂を知った仲間が手を振っているのが見えた。  
その時、初めて安堵の気持ちがあわいてきた。

### 山岳班OB、日本最初の快拳

その後約1ヶ月間、地図の上でも空白地帯と云われて  
いたランタン・ヒマールの地形・地質・植物などの調査  
活動を続けた。そして、11月の終わりに帰途についた。

往路と同様1ヶ月余の船旅の後、神戸港に降り立った  
のは年も明けた昭和35年(1960年)1月6日だった。  
出発から帰国まで約5ヶ月間を要したことになる。

地元では盛大な歓迎をしてくれた。飯田駅に降り立つ  
と松井飯田市長、平林飯田高校長、伊沢集治山岳会長を  
初めとする、大勢の方々に迎えられた。飯田高校の女生  
徒から花束が贈られる。プラスチックバンドを先頭にオープン  
カー7台に分乗しての市中パレードとなった。その後、  
飯田市中央公民館で歓迎と報告の会がもたれた。

主峰のランタン・リルンは手に負えなかったが、第2  
目標としたヒマラヤ峰に初登頂できたのは、日本の戦前、  
戦後を通してヒマラヤ登山史上では4番目のこと、社会人  
山岳会のヒマラヤ登頂は日本では最初の快拳となった。